

判断構造の再現性と汎用性に基づく セキュリティマネジメントモデルの構築

－ フィルター理論・防犯ピラミッド理論・AI抽象化の統合的適用 －

日本危機管理学会 年次大会 2025年5月31日

SIP(Security Innovation Project)

成田 浩志



Security Innovation Project

Agenda

1. 自己紹介
2. 背景と課題意識
3. 研究目的とアプローチ
4. 理論的背景
5. AI活用の位置づけ
6. 小学校での支援プロセス
7. 得られた知見
8. 今後の展望
9. まとめ・締め



自己紹介



名前

成田 浩志（こうじ）

業務

セキュリティ戦略コンサルタント
デジタルフォレンジックエンジニア
行政書士 護身術指導員

経歴

株式会社帝国データバンク	調査員
株式会社FRONTEO	調査士・PM
危機管理コンサルティング会社	執行役員
<u>SIP（Security Innovation Project）</u>	<u>代表</u>
<u>その他複数の警備会社で役員、顧問を兼任</u>	

危機管理業務

公立小学校・中小企業セキュリティ戦略策定
大手メーカー情報漏洩・国際産業スパイ事件調査
大手マスコミ情報漏洩事件フォレンジック調査
中小企業サイバーセキュリティコンサルティング
犯罪被害者警護・犯行調査

自己紹介

実務・セキュリティ系論文

- ・ 防犯ピラミッド理論に基づく防犯対策フレームワークの考案と考察（2024）
- ・ フィルター理論による加害行為対策と包括的な自己防衛フレームワークの提案（2024）
- ・ 事案の抽象化とAI支援を活用した戦略的セキュリティマネジメントの構築と実装（2025）

哲学・社会学系論文

- ・ 愛情と信頼を基盤とした持続可能な相互扶助コミュニティの形成（2024）
- ・ 知性層構造モデルの再構築と階層的思考の実践的応用（2024）
- ・ 加害性のなさを基軸とする価値論と資本主義社会の倫理的補完と移行設計（2025）



特許

- ・ 公共空間における加害行為またはその予兆の検知およびBLE（Bluetooth Low Energy）ブロードキャスト通知システム（特願2025-089329）

現場と哲学を基に6つの論文と1つの特許に展開

本会の論文投稿 → 社会設計が目標です

1.

対人トラブル・ 犯罪の多様化

学校・医療・行政などの
現場で、暴力・迷惑・モ
ラル逸脱が複合化。

2.

対応判断の 負荷

判断の「曖昧さ」が現場
のストレス・責任集中・
初動遅延を引き起こす。

3.

マニュアルの 限界

一般的なガイドラインで
は現場の複雑性に十分対
応できない。

4.

再現可能な 判断構造が必要

個人の直感に頼らず、段
階的かつ合理的な判断基
準の設計が求められる。



① 防犯・セキュリティ対応の戦略的強化

複雑な現場には、“その場しのぎ”ではなく、組織的・構造的な対策が必要

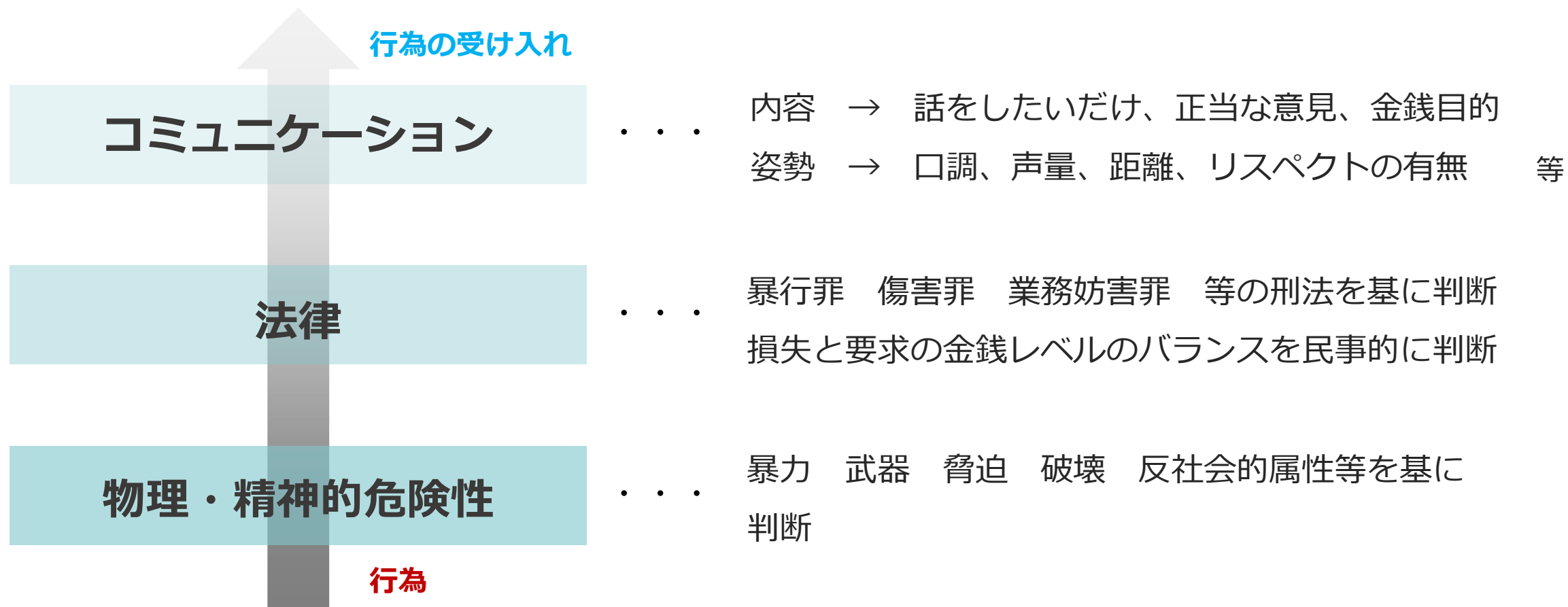
② 独自理論を基盤とした加害対策モデル

フィルター理論・防犯ピラミッド理論を基盤とした再現可能な対策の設計

③ AIを補助的に活用して設計

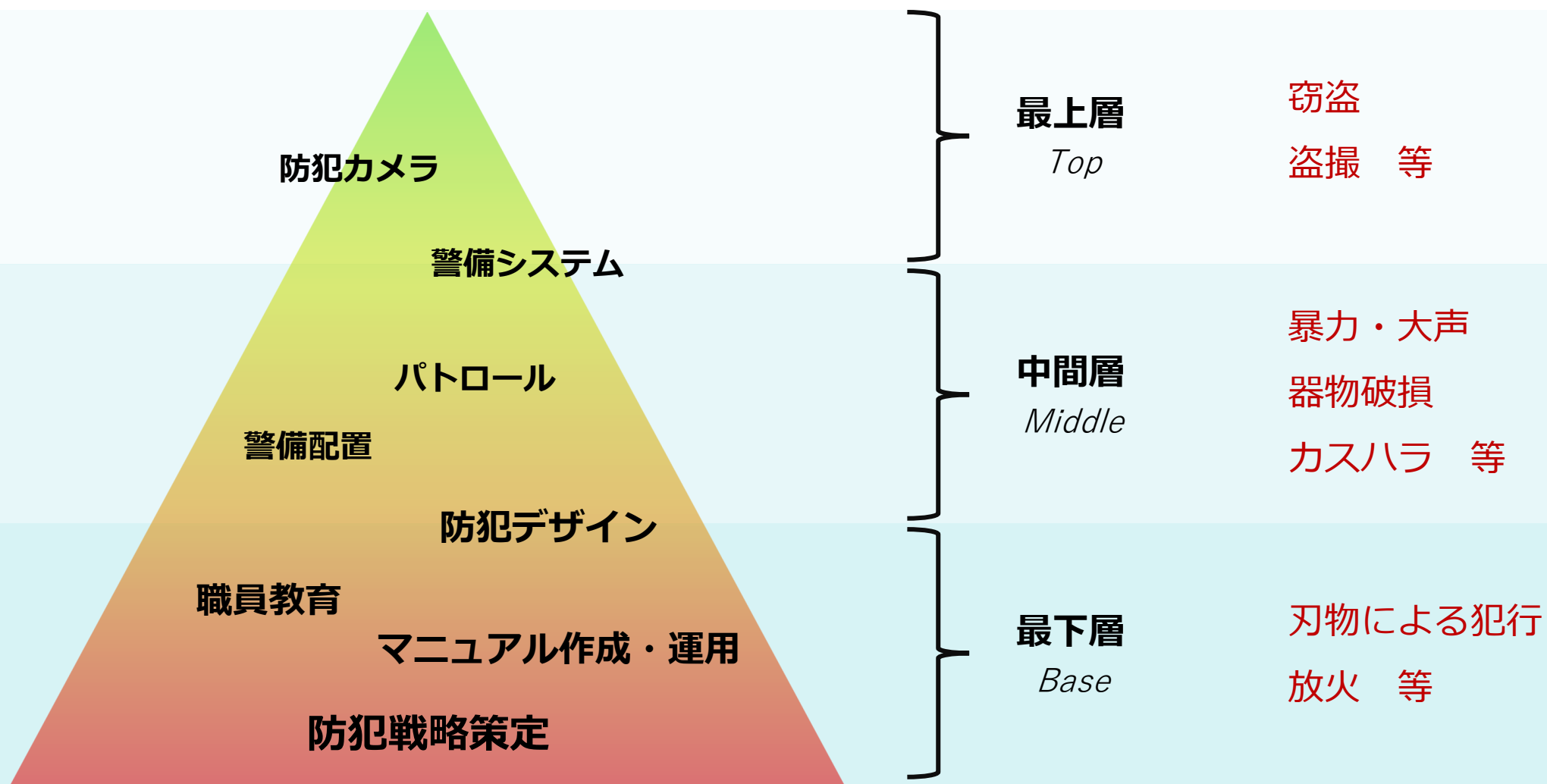
人間とAIの役割分担により、判断支援と組織対策を統合したモデルへ

危険度の判断 3つのフィルター理論



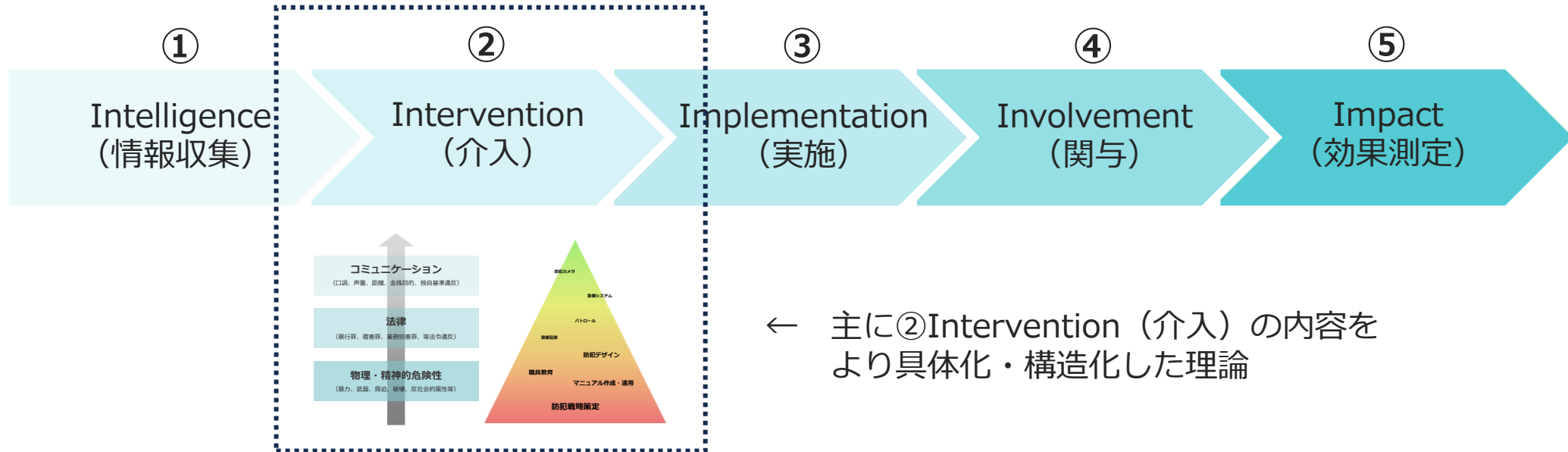
各フィルターを基準に
危険度を判断

対策の階層構造 防犯ピラミッド理論



※ピラミッド理論は、犯罪機会論・環境犯罪学・CPTED（防犯環境設計）の観点参考に、対策を構造化した実践モデルです。

5Isフレームワーク



- ・ 状況的犯罪予防に基づく環境制御的視点
- ・ 犯罪機会論
- ・ Paul Ekblomの5Isモデル (2011)

これらの影響を受けながら、現場用に新たな枠組みを構築

理論的背景 防犯分野における学術と実務の乖離（独自理論の必要性）

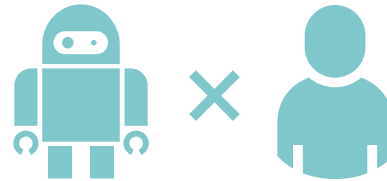
分野	乖離度	備考・実態
サイバーセキュリティ	★☆☆☆☆（乖離小）	学術と実務が密接。脆弱性研究、暗号理論、AI活用などは産学連携が多く、OSSや国際標準も学術出身。現場との対話が常に行われている。
医療・薬学（臨床寄り）	★☆☆☆☆（乖離小）	論文と臨床が密接。製薬・治験などはエビデンスベースで動くため、実務も学術も互いを必要としている。
教育学（特に学校現場）	★★★★☆（乖離大）	学術は理論や観察研究が中心。現場では即時的・情緒的判断が求められ、論文の実装性に乏しいことも。校長などの裁量に依存。
心理学（特に臨床以外）	★★★★☆（乖離大）	実験心理学や認知研究は抽象度が高く、教育・カウンセリング現場に直結しづらい。理論重視の傾向あり。
福祉・介護	★★★★☆（乖離中）	一部で実務者主導の理論化が進んでいるが、制度設計との接続は不完全。学術論文が現場で読まれることは稀。
都市計画・防災	★★☆☆☆（乖離やや小）	ハザードマップや災害対応などでは連携あり。ただし行政の現場では“理論の速度”が実務に追いつかないこともある。
法律学	★★★★☆（乖離中）	判例・制度設計において密接な領域もあるが、学術法学は抽象理論重視。弁護士・行政との温度差あり。
防犯・危機管理（ソフト寄り）	★★★★☆（乖離大）	ハードセキュリティは近いが、心理的安全・カスハラ・対人安全などのソフト領域は乖離が顕著。現場では経験と直感が支配的。
行政学・公共政策	★★★★☆（乖離中）	政策研究は多くあるが、自治体の現場では活かしきれないことも。NPM導入後はやや接近傾向。
経営学・組織論	★★☆☆☆（乖離やや小）	ビジネススクールなど実務連携が強く、学術発信が経営方針に直結する場合も。ただし企業の“空気”を理論化するのは難しい。

※本表はChatGPTによる出力を参考資料として掲載



Step.1 情報収集

- アンケート
- ヒアリング
- 事例分析の実施・記録や経緯をAIで要約・整理



Step.2 構造化







- AIで分類抽出し、専門家が構造設計
- 脆弱性と優先度を可視化



Step.3 納品・確認

- 対策マニュアルを納品
- 校内で確認・運用調整段階へ

AI活用の位置づけ AIと人間の役割分担

実務フェーズ	 AI	 人間 (専門家)
 情報収集	ヒアリングメモの要約 アンケート素案の作成 発話ログの文字起こしと分析	現場からのヒアリング設計 アンケートの完成 重要な文脈の補足・確認
 抽象化 構造設計	ヒアリング等から類型分類 リスク因子抽出 脆弱性の一覧化支援	判断軸の選定 対処構造の設計 意図のくみ取り
 対策設計	参考事例の提示 人間による設計後の妥当性判断	現場の実情に即した設計 意思決定の基準作成 優先順位づけ
 運用・調整	文書化・通知 記録支援進捗のチェックリスト作成	関係者間の調整 説得現場の微調整と改善判断

①

効率性と柔軟性

人とAIが役割分担することで、短期間（ヒアリングから約2週間）で設計・納品が可能。限定された人員でも柔軟に対応できた。

②

理論的有効性

フィルター理論による段階判断、ピラミッド構造による対策整理が、現場判断を支援する納得感のあるフレームと定性評価。

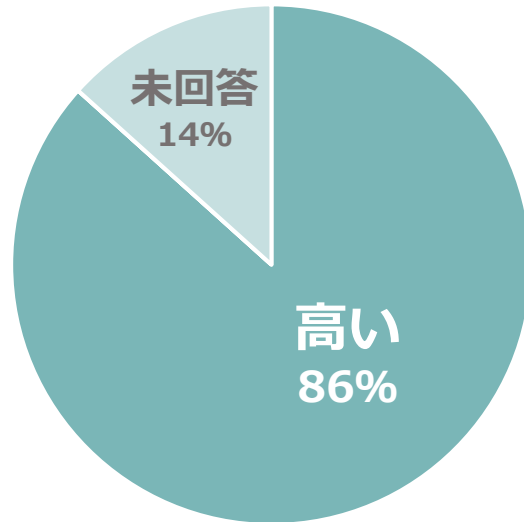
③

再現性と現場適応性

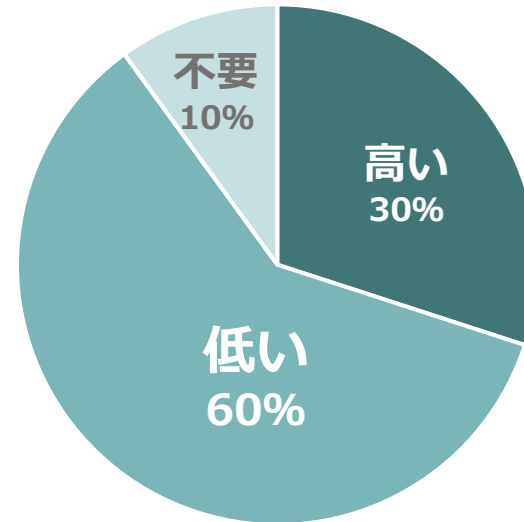
他校でも同様のプロセスが応用可能でありながら、現場の個別性も取り込める。

理論に対する初期の予備調査

理論的納得感



導入優先度



特徴

- 良質なサンプル
- 高い理論的納得感と本質解決を求める人への遡及

課題

- 導入の金銭的、一部人的コスト
- 自己選択バイアス
- インタビューの非構造
- サンプル数が極小（統計データ収集不可欠）

※調査対象者

1. 元警察官
2. 相談支援専門員
3. 福祉系一般社団法人 代表
4. 大手保険会社 支社長
5. M & A会社 社長
6. 福祉系行政書士
7. 危機管理専門社労士 代表
8. N P O法人広報
9. 防犯カメラ設置会社 管理職
10. 小学校校長
11. 医療法人 理事長
12. 医療法人 事務長
13. 保険営業兼福祉施設代表
14. 健康経営コンサル系一般社団法人 代表
15. 薬局チェーン 管理職

1. “必要性の顕在化”と“コスト”の障壁

金銭的負荷は限定的だが、利益を生まないPJTへの人的リソース投入の抵抗感は強い。
公立学校など柔軟性の低い組織では、コスト自体が障壁となることもある。

2. 統計的な検証が不十分

構造的な調査数・導入事例が限られており、有効性の一般化には今後のデータ蓄積が必要。
また、本理論は凶悪犯罪対策への応用が期待されるが、発生件数の関係上統計的検証が不可能。

3. 専門家による設計支援が必要

抽象化まではAIで対応できるが、現時点では対策設計に専門家の関与が欠かせない。
雛形や設計方法の提示でカバーが可能と思われる。

4. 継続運用の難しさ

現場で使い続けるには、研修や伴走支援、現場やリーダーの情熱に基づく運用浸透が必要。

5. 対象者が限定される

課題が顕在化し、既存手法に限界を感じて本質的な対策を求める現場からのみ求められる。

① 信頼と認知の拡大・他校・他領域への展開

データとケーススタディによる説得力の向上により、横展開を実現

② 非加害特許システムの社会実装

理論と技術の融合で、非加害インフラを社会に実装

③ 哲学・社会学と接続し、加害を許容しない社会の設計

現場支援と並行し、制度・文化・評価軸を少しずつ調整し、非加害社会を実現

SIP 6つの論文（実務 × 哲学 × 社会学）と特許を
「非加害社会」の**具体的設計図**として発信

- Cohen, L. E., & Felson, M. (1979). Social Change and Crime Rate Trends: A Routine Activity Approach. *American Sociological Review*, 44(4), 588–608.
- Ekblom, P. (2011). *Crime prevention, security and community safety using the 5Is framework*. Palgrave Macmillan.
- Felson, M., & Clarke, R. V. (1998). *Opportunity makes the thief: Practical theory for crime prevention*. Home Office, Policing and Reducing Crime Unit, Research, Development and Statistics Directorate.
- 成田浩志 (2024). 防犯ピラミッド理論に基づく防犯対策フレームワークの考案と考察. SIP内報告書（未公刊）.
- 成田浩志 (2024). フィルター理論による加害行為対策と包括的な自己防衛フレームワークの提案. SIP内報告書（未公刊）.

加害なき社会の実現に向け
現場理論 × 技術 × 哲学 × 社会学 の横断により
社会構造の調整を目指します。

SIP(Security Innovation Project)

成田 浩志